大学生における性の発達と依存対象について

東京都立大学

清水 弘 司¹

A STUDY ON THE SEXUAL DEVELOPMENT AND TARGETS OF DEPENDENCE IN COLLEGE STUDENTS

HIROSHI SHIMIZU

Tokyo Metropolitan University

The correspondence between sexual development (S-D) and targets of dependence in college students was examined. Two questionnaires were used to investigate their sexual attitudes, sexual development, and central targets of dependence. Main results were as follows: (a) Subjects higher in S-D were more open to such sexual matters as virginity; (b) the higher subjects were in S-D, the more likely they were to select their lovers as a central target of their dependence; and (c) there was a tendency, although not statistically significant, suggesting that the lower subjects were in S-D, the more likely they were to select their family and best friends as the target.

性の発達は、臨床的な方法と調査的な方法によって研究されてきた。臨床的方法による研究は、Freud (1905) 以後、自我と対人関係の発達とのかかわりの中で性の発達を検討している。Freud (1936) は“思春期になって、衝動が強大になるにつれ、青年がどんな防衛法をとるにしても、その結果はいつも対人関係にあらわれることはいうまでもない”とし、性の発達と対人関係との関連を指摘している。また、Sullivan (1953) は、異性との親密な関係を築くためには、それ以前に同性同年輩者との親密さをもつことが重要であるとし、対人関係の発達の方向を示している。このような臨床的な方法により共通に指摘されることは、性の発達における対人関係の重要性である。すなわち、動物のような本能衝動的規範(norm)をもたない人間の性は、自ら後天的にそのための対人関係を獲得しなければならないがゆえに、幼児期からの対人関係によって影響を受けるものであることを示唆している。

調査的方法による研究は、Kinsey, Pomeroy, & Martin (1948) 以後、多くの実態調査がなされ、性の発達と性格や環境条件等との関連について主に検討している。これらの中で、その調査の中心的テーマではないが、家庭環境との関連に言及している研究もある。イギリスの 15

歳から 19 歳の青年を対象に調査した Schofield (1968) は、父親と仲のよい女子は性経験が少ない、母親と仲のよいものは男子・女子とも性経験が少ないことを見出している。また、わが国の 16 歳から 21 歳の高校生・大学生を対象に調査した間宮 (1976) は、生育家庭の暗くて楽しくないふんい気の影響は性意識については男子・女子ともないが、性的体験は暗くて楽しくない家庭に育った女子に多いことを見出している。これらの結果は、家庭環境が青年の性経験に影響を及ぼすこと、家族との関係が重要であることを示している。Harlow & Harlow (1962) が行なった観察によると、幼少期に隔離飼育された赤毛ザルは成熟しても正常な性関係を発展させることができなかった。母親や仲間との関係をもたずに成長した赤毛ザルは性行動に障害があるという結果が、人間についても妥当とするならば、依存欲求の満足の如何が性本能の発現を左右することを示唆しているように思われる (土居, 1970)。

これらの研究において、性の発達と対人関係の関連が明らかにされている。しかしながら、臨床的方法によるものは、異常な (abnormal) 対象についての治療・観察過程から見出されたものであり、一般的な発達とは異なる面をもつことが考えられるために、一般的な対象について検討することが必要であると思われる。また、調査的方法によるものは、家族との関係についての言及しているが、性の発達と関連する対人関係を考えるならば、異性をはじめとしてもっと広い対人関係について検討する必要がある。さらに、比較行動学の観察の示唆す

¹ 本研究をご指導下さった東京都立大学の詫摩武俊教授、貴重な示唆・資料をいただいた横浜国立大学の間宮 武教授・依田 明教授、千葉大学の青木孝悦助教授、国立音楽大学の高橋恵子助教授に厚く感謝いたします。

る性欲求と依存欲求の結びつきを考慮するならば、対人関係といっても、依存要求を向ける対象について検討することが有効であると考えられよう。

以上のことから、本研究では一般の大学生を対象に、性の発達と対人関係との対応関係を依存要求を向ける対象について検討することを目的としている。ところで、現在まで性の発達を記述する適切な基準は設定されていないので、どのように性の発達をとらえるかが問題となる。そこで、性意識と性行動との関連から性の発達の測度を調査Ⅰにおいて検討し、それと依存対象との対応関係を調査Ⅱにおいて検討する。

調 査 Ⅰ

総理府（1971, 1975）が行なった調査によると、わが国の青少年の性意識と性行動のあいだに微妙なずれが見出されている。また、Eysenck（1976）は、性格のタイプ（精神病質・外向性・神経質）により性的態度（性的過敏性等の14因子）が異なることを明らかにし、個人差をとらえることが必要であることを指摘している。個人における性の発達は意識と行動の両面に現われる。身体的成熟が性についての意識を変え、その意識が性行動に作用し、その行動がまた意識にフィード・バックするというように相互関連するものと考えられる。そこで本調査では、性の発達の程度を記述する測度について検討するために、性的態度・性意識・性行動の関連をみた。

方 法

性的態度 Eysenck（1970）の98項目からなる性的態度についての質問を、わが国で行なったところ7因子が抽出された。その因子に相応する質問項目から、わが国で調査するのに不適切なもの（ビル等について）を除き、20項目を選んで調査項目とした。

性意識・性行動 Schofield（1968）は、青少年の性行動が発展する5段階を導き出している。また、田中（1973）は、婚前の性行為のタイプを9段階を用いて調査している。この両段階を答えやすく改訂し、性行為の内容が次第に発展するように、次の6段階を構成した。

1. クラブ・趣味などのグループで行動をとる。
2. 二人でデートする。
3. 手を握ったり、腕を組んだりする。
4. キスしたり、抱きあったりする。
5. ペッチングする。
6. 性交する。

この段階を、異性との交際において許容できると考える限度について質問し、性意識の指標とした。他方、これまでどのような性的交渉をもったか、その体験をこの段階について質問し、性行動の指標とした。

実施 調査対象は東京都内の2大学の18歳から23歳

の学生、男性216名・女性271名で、いずれも無記名で協力を依頼した。

結果の信頼性 調査対象の約10%に性体験について、1・2週間おいて再調査した。一致率は90.7であった。

結果と考察

本調査でとらえた性的態度の構成について検討するために、主因子法・バリマックス回転を行なったところ、Table 1に示すように3因子が抽出された。第1因子は、自分の性的欲求・性的関心についての受けとめ方や敏感さなどを示す側面で、〔性的感受性の因子〕とでもいうのが適当かと思われる。第2因子は、婚前交渉・性話やわいせつ物等に対する態度を示す側面で、〔性的道徳性の因子〕とでもいうのが適当かと思われる。第3因子は、異性と接している時の感じ方や気楽さなどを示す側面で、〔対異性態度の因子〕とでもいうのが適当かと思われる。本調査ではこれらの3因子が性的態度を構成していたが、Eysenck（1976）のものでは14の因子で構成されており、このほかの側面があることは十分考えられる。これは質問項目の減少にともなうものであろう。

性意識と性的態度の関連を検討するために、異性との交際において許容できると考える限度の6段階について性的態度の各因子の因子得点の平均を分散分析した。その結果Table 2に示すように、第1因子、第2因子に有意差があった。すなわち段階5・6に含まれる許容限度の高い人は自分の性的欲求・性的関心に敏感でわずらわされていたが、中程度（段階2・3・4）の人にその傾向はなかった（第1因子）。また、段階が高くなるに従って性的事象に対する態度は開放的になっていた（第2因子）。

性行動と性的態度の関連を検討するために、これまでもった性的体験の6段階について性的態度の各因子の因子得点の平均を分散分析した。その結果Table 3に示すように、第2因子、第3因子に有意差があった。すなわち性体験の段階が進んでいる人ほど性的事象に対する態度は開放的になっていた（第2因子）。また、性体験の段階が進んでいる人ほど異性と接する機会も多くて気楽に交際していた（第3因子）。

性意識と性行動の関連を検討するために、異性との交際において許容できると考える限度の6段階とこれまでもった性的体験の6段階を比較した。その結果Table 4に示すように、男性・女性ともに性意識と性行動のあいだにずれがあるものが多かった。このずれの方向から分類すると、性意識より性行動が先行している行動先行型、性意識と性行動が一致している一致型、性行動より性意識の先行している意識先行型に分けることができる。各々の型の比率は、男性では行動先行型9.1%、一致型26.8%、意識先行型64.1%であった。女性では行動先行型19.2%、一致型27.8%、意識先行型53.0%で

TABLE 1
Sexual attitudes

	Rotated factor matrix		
	Factor 1	Factor 2	Factor 3
1. I have many friends of the opposite sex.	-.065	.074	.633
2. I feel at ease with people of the opposite sex.	.119	.024	.753
3. I am embarrassed to talk about sex.	.060	-.553	-.099
4. Sex jokes disgust me.	-.066	-.559	-.015
5. I have had more than one lover at the same time.	.122	-.004	.512
6. I feel at ease with people of my own sex.	.056	-.110	-.472
7. I don't feel nervous with the opposite sex.	-.002	-.015	.757
8. I consciously try to keep sex thoughts out of my mind.	.003	-.532	.057
9. If you were offered a highly pornographic book, would you accept?	.280	.610	.098
10. If you were invited to see a "blue" film, would you accept?	.292	.588	.128
11. All in all I am satisfied with my sex life.	-.470	-.205	.116
12. Masturbation is unhealthy.	.130	-.452	.044
13. Sexual feelings are sometimes unpleasant to me.	.583	-.195	.020
14. It is better not to have sex relations until you are married.	-.042	-.651	-.064
15. Sometimes thinking about sex makes me very nervous.	.757	-.096	.044
16. Sex without love is highly impure.	-.167	-.533	-.038
17. Virginity is a girl's valuable possession.	.044	-.541	-.059
18. Virginity is a boy's valuable possession.	.135	-.533	-.021
19. Thoughts about sex disturb me more than they should.	.683	.014	.048
20. Sometimes sexual feelings overpower me.	.641	.191	.102

TABLE 2
Analyses of variance using mean factor scores
of sexual attitudes in each stage
of sexual consciousness

Stage	Factor		
	1	2	3
1	.043	-.478	-.064
2	-.115	-.343	-.069
3	-.074	-.288	-.007
4	-.067	-.035	-.038
5	.418	.271	.387
6	.269	.996	.037
df	5	5	5
F	2.546*	22.982**	.979

* $p < .05$ ** $p < .01$ TABLE 3
Analyses of variance using mean factor scores
of sexual attitudes in each stage
of sexual behaviour

Stage	Factor		
	1	2	3
1	.067	-.311	-.483
2	-.163	-.163	-.262
3	-.148	.142	.201
4	-.093	.189	.376
5	.305	.281	.536
6	.181	.745	.800
df	5	5	5
F	2.159	9.841**	18.909**

** $p < .01$

TABLE 4
Association between the stages of sexual consciousness and sexual behaviour

Stage	Sexual behaviour													
	Male							Female						
	1	2	3	4	5	6	Total	1	2	3	4	5	6	Total
1	4						4	5		3	3			11
2	13	7	5	1	1	2	29	9	17	12	3	2	3	46
3	15	6	17	1	2	3	44	22	24	21	8	2	5	82
4	22	13	15	8	1	2	61	20	22	26	24	5	5	102
5	1	3	2	4	5	1	16	1	1	4	2	5		13
6	13	5	8	8	6	15	55		2	3	4	1	2	12
Total	68	34	47	22	15	23	209	57	66	69	44	15	15	266

あった。男性・女性とも行動先行型より意識先行型の占める比率が高く、性行動より性意識が先行する傾向にあるが、男性においてその傾向が著しい。この意識先行の傾向は、意識的には許容していても、それを行動的に実行する対人関係をもたないことによるであろう。あるいは対人関係はもっているが、実際の行動にうつすことをためらっているためかもしれない。意識先行・行動先行という2方向のいずれの様式については、環境要因等を加えて検討されることが必要であろう。

性的態度・性意識・性行動からとらえた性の発達には、同一世代の大学生でも個人差や性差があった。さらに、個々の青年の性でもその意識と行動のあいだにずれが見出された。このことから、個人の性の発達の程度を性意識・性行動のどちらか一方だけで記述することは不適切であると考えられる。さらに、本調査で用いた性意識・性行動の6段階の一致しているものは男性・女性とも27%前後と低いことから、発達の段階の基準をゆるめることが必要であろう。

調 査 Ⅱ

間宮(1976)は、環境条件が性意識・性行動に及ぼす影響を検討し、次のような結果を得た。“異性接触欲、異性接触経験、異性ハント、キッス経験、ベッティング経験、性交経験などの性意識・性行動体験では、女子は家庭のふんい気如何と有意の関連をもち、家庭が暗くて楽しくないふんい気の下に生活しているもののほうが、そのような体験が多い傾向にある。”また、男子の性交経験は両親健在のものに少なく、一方を失っているものに多く、両親とも失っているものに最も多かった。

Schofield(1968)の研究においても、親と仲のよいものは性経験が少なかった。また、性経験をもつものは、男子・女子とも性以外の問題でも両親に相談することが

少なかった。これらの結果は、性体験の少ないものが多いものより両親との結びつきが強いことを示唆している。すなわち、性意識・性行動の発達していないものは、発達しているものより両親と親密な親子関係をもつ傾向があることが予測できる。したがってこのことから、性の発達の程度により、親密な感情をもって接する対象が異なることが考えられよう。

高橋(1973)は、女子青年における依存性の発達について検討し、次のような結果を得た。同性の友人は高校生において最も依存の対象として重視されていた。これに対して、中学生ではまだ重要な対象とはなっていなかった。そして、大学生になると同性の友人はさして重要な対象とはなり得なかった。他方、愛情の対象は年齢の上昇につれて重要な対象となっていく。高橋によると、大学生ではかつて(高校生時代に)友人が果たしていた機能までも、愛情の対象がよりよく果たすようになるからではないかと考えられた。また、高校生の親友を中心とする型は、親友-愛情の対象両者を中心とする型に近いとみなされ、愛情の対象への移行型と考えられた。すなわち、依存対象は同性の友人から愛情の対象へ変化することが多く、年齢の上昇につれて性的な面が顕著になってくることを示しているといえよう。さらに、生活史による調査(高橋, 1976)から、大学生で現在家族が優位になった対人行動の枠組をもっているものは幼児期からその傾向がみられた。それに対して、現在非家族が優位な対人行動の枠組をもっているものは幼児期から明るい積極的な子どもで、同性だけでなく異性の友人との交渉が活発であったことを報告している。この結果から、依存性の発達に家族を中心とするものと、非家族を中心とするものがあることが考えられよう。そして、先の間宮や Schofield の結果にみられるように、両親との関係により性体験が異なることを考慮するならば、依存要求を向ける対象により、同一世代の青年でも性の発達

TABLE 5
Association between sexual development and the focus of dependence (%)

Focus of dependence	Group of sexual development							
	Male				Female			
	Low	Middle	High	Total	Low	Middle	High	Total
Lover	6 (25.0)	21 (51.2)	14 (51.9)	41 (44.6)	8 (25.8)	40 (50.6)	5 (62.5)	53 (44.9)
Best friend	7 (29.2)	8 (19.5)	4 (14.8)	19 (20.7)	9 (29.0)	17 (21.5)	1 (12.5)	27 (22.9)
Respected person	4 (16.7)	4 (9.8)	2 (7.4)	10 (10.7)	7 (22.6)	6 (7.6)	1 (12.5)	14 (11.9)
Brother/Sister	1 (4.2)	2 (4.9)	3 (11.1)	6 (6.5)	2 (6.5)	3 (3.8)	1 (12.5)	6 (5.1)
Mother	3 (12.5)		2 (7.4)	5 (5.4)	1 (3.2)	5 (6.3)		6 (5.1)
Teacher		2 (4.9)		2 (2.2)		3 (3.8)		3 (2.5)
Father	1 (4.2)			1 (1.1)		2 (2.5)		2 (1.7)
Plural focus	2 (8.3)	4 (9.8)	2 (7.4)	8 (8.8)	4 (12.9)	3 (3.8)		7 (5.9)
Total	24 (100.0)	41 (100.0)	27 (100.0)	92 (100.0)	31 (100.0)	79 (100.0)	8 (100.0)	118 (100.0)

の程度に相違があることが予測できる。

ところで、調査Ⅰの結果にみられるように、個人の性でもその意識と行動のあいだにずれがあり、どちらか一方だけで性の発達の程度を決定することは適当でないと考えられる。そこで本調査では、性意識・性行動の両面からとらえたものを“性の発達”とした。それと依存対象との対応関係を検討するために、以下の予測が立てられた。

(1) 性の発達しているものは、その発達していないものより、愛情の対象を依存要求を向ける中核的な対象（以下依存の焦点と呼ぶ）とする率が高いであろう。

(2) 性の発達していないものは、その発達しているものより、両親を依存の焦点とする率が高いであろう。

方 法

性の発達 調査Ⅰと同じ性意識・性行動の6段階の指標を用いたが、調査Ⅰの結果にみられた両者のずれを考慮し、次の低・中・高の3群に分類した。すなわち、性意識・性行動ともに1・2段階にあるものを低位群、3・4段階にあるものを中位群、5・6段階にあるものを高位群とした（調査Ⅰの方法参照）。

依存対象 高橋（1973）は、依存を（1）さまざまな対象に対して、（2）どのような接触や反応を、（3）どれほど強く求めているか、によってとらえた。本調査でも、対象・様式・強度の3要因によって依存対象をとらえ

た。具体的には高橋（1968）の質問項目を簡略化して、36項目の中15項目を選んだ。項目の選択にあたっては6人の心理学専攻の大学院生に依頼してQ分類を行ない、4人が一致した項目を採用した²。この15項目は（1）ともにあることを求める・（2）注意をむけてもらうことを求める・（3）助力を求める・（4）保証を求める・（5）心の支えを求めるの5様式からなり、各々3項目によって示された。この15項目に関して、母親・父親・最も親しいきょうだいの一人・最も親しい友人（以下親友と呼ぶ）・異性の友人で一番好きな人（以下愛情の対象と呼ぶ）・最も尊敬している人・最も尊敬している先生の計7人について、気持ちにあてはまる程度を「そうである」から「ちがう」の5段階で独立に、都合7回評定させた。この5段階に4から0の得点をあたえ、各対象について依存の得点を15項目の合計であらわした。この得点の最高のものを、依存対象の焦点とした。同最高得点の場合は複数焦点として、結果の分析から除いた。

実施 調査対象は調査Ⅰに同じである。性意識・性行

² 調査結果をクラスター分析したところ、1項目に様式のずれがあった。他の14項目はQ分類の結果と同一のまとまりを示した。焦点の決定には影響がないので、そのまま用いている。また、焦点の決定の仕方は、上述するように高橋（1968）の方法とは異なっている。

動が前記の低・中・高の3群分類のいずれかに分類されたものは、男性92名・女性118名であった (Table 4 参照)。

結果と考察

性の発達の3群分類の構成は、男性が低位群24名・中位群41名・高位群27名、女性が低位群31名・中位群79名・高位群8名であった。各群において依存対象の焦点とされた対象の占める比率が Table 5 に示されている。本調査の対象である大学生の依存対象の一般的傾向を検討するために、どの対象が焦点とされる率が高いかをみた。男性の44.6%・女性の44.9%が愛情の対象を焦点としていて、他の対象が焦点とされる率よりかなり高かった。この結果は、高橋 (1973) の大学生の単独焦点型では愛情の対象とするものが最も多いという結果と一致している。これは大学生では性の発達が顕著になってきたために、異性に対して親密な感情を向けるものが多くなっていることを示していると考えられる。

性の発達の程度と依存の焦点として愛情の対象が選ばれる傾向について検討するために、性の発達の3群分類の各群において愛情の対象の占める比率の Bartholomew・傾向検定を行なった。男性 ($\chi^2_3=5.10$, $-\rho_{12}=0.4$, $p<.5$)・女性 ($\chi^2_3=6.56$, $-\rho_{12}=0.2$, $p<.25$)とも有意な傾向があった。すなわち、性の発達の程度が高いものほど愛情の対象を依存の焦点とする傾向があった。ことに女性では、Fig. 1 に示すように、一次的 (linear) な関係にあるといえよう。これらの結果は、性の発達と愛情の対象との対応関係を期待した予測 (1) を支持しているといえよう。これは性の発達しているものは、その人の生活の中で異性との関係が重要な位置を占めているためと考えられる。

性の発達の程度が低いものほど両親を依存の焦点とする傾向について検討したが、はっきりした結果は得られなかった。これは各群とも母親・父親を焦点とするものが、高橋 (1973) の結果に較べてもきわめて少なく、こ

の傾向を検討するのに不適切であったためであろう。この結果は、性の発達と両親との対応関係を期待した予測 (2) を支持していない。この予測については、年齢の幅を大きくして再検討されることが必要であろう。次いでこのことに関連して、家庭のふんい気が女子の性体験に影響を及ぼすという間宮 (1976) の結果から、家族との関係を検討した。性の発達の3群分類の各群において、家族の一員である母親・父親・きょうだいのいずれかを依存の焦点としたものの比率が Fig. 2 に示されている。男性・女性とも有意な傾向はなかった。しかし、女性では性の発達の程度が低いものほど家族を依存の焦点とする傾向を示唆するものがあり、間宮 (1976) の結果と類似しているといえよう。

性の発達の程度と依存の焦点として親友が選ばれる傾向について検討するために、性の発達の3群分類の各群において親友の占める比率を傾向検定した。男性・女性とも有意な傾向はなかったが、Fig. 3 に示されるように、性の発達しているものほど親友を依存の焦点とする比率は少なかった。したがって、この傾向を示唆するものがあると考えられるが、性の発達の程度の低いと予想される高校生等を含め年齢の幅を大きくして再検討されることが必要であろう。ところで、性の発達の程度の低いものでは男性の29.2%・女性の29.0%が親友を依存対象の焦点としていて、他の対象が焦点とされる率より高かった。高橋 (1973) によれば、同性の友人は高校生において最も依存の対象として重視されていた。これは大学生でも性の発達していないものでは、高校生の場合と同じように、その人の生活の中で親友との関係を最も重視しているものがかなりいることを示しているといえよう。

本調査の対象である大学生では、一般に愛情の対象が依存の焦点とされる率が最も高かったが、中でも性の発達の程度が高いものほどその傾向が強かった。しかしながら、性の発達の程度の低いものでは同性の親友や家族

FIG. 1. Ratio of selecting a lover as a focus of dependence in each group of sexual development.

FIG. 2. Ratio of selecting a family member as a focus of dependence in each group of sexual development.

FIG. 3. Ratio of selecting a best friend as a focus of dependence in each group of sexual development.

が依存の焦点とされる率が高かった。このことから、性の発達の程度により依存要求を向ける対象に相違があるといえよう。すなわち、性の発達の程度が高くなるにしたがって、対人関係も性的な要因を反映したものになり、異性との関係が重要になっていくと考えられる。それに対し、性の発達の程度の低いものでは性的要因の影響は少なく、親友や家族との関係が重要な位置を占めているものと思われる。さらに、性の発達と依存要求を向ける対象のあいだにはこのような一方向的な影響だけでなく、対人関係の枠組の変化、たとえば愛情の対象があらわれることにより、性の発達の程度が高くなることも考えられる。こうしたことから、大学生における性の発達と依存対象とは相互関連的に発達・変容していくと考えられるのではないだろうか。本研究ではその対応関係を検討するにとどまったが、両者の因果的な関係について、同一対象についての縦断的研究やパス解析等の統計的検討を加えることが必要であると考えられる。また、発達の年齢の幅を大きくして、第2次性徴の出現した以降の中学生・高校生等を対象に実証的に検討することが必要であろう。

要 約

本研究の目的は、大学生を対象に性意識と性行動の関連からとらえた性の発達と対人関係との対応関係を依存要求を向ける対象について検討することである。

調査Ⅰの目的は性意識と性行動の関連から性の発達の測度を検討することである。性的態度に関する質問と性意識・性行動の発達の程度を示す6段階（グループで交際するから性交まで）の指標が用いられた。

主な結果は次の通りである。

1. 性意識（異性交際における許容限度）の段階が高い人ほど、性的事象に対する態度は開放的になっていた。性意識の段階の高い人は、自分の性的欲求・性的関心に敏感でわずらわされていた。

2. 性行動（性体験）の段階が高い人ほど、性的事象に対する態度は開放的になり、異性と接する機会も多くて気楽に交際していた。

3. 男性・女性とも性行動より性意識が先行している傾向があるが、男性において著しかった。また、性の発達の程度は、個人でもその意識と行動のあいだにずれのあるものが多かった。

調査Ⅱの目的は、性の発達と依存対象との対応関係を検討することである。性の発達は、性意識・性行動をこみにした低・中・高の3群を指標にした。依存対象は、対象・様式・強度から依存の中心対象（焦点）を求めた。

主な結果は次の通りである。

1. 一般に大学生では愛情の対象を依存の焦点とする

ものが多く、男性・女性とも約45%あった。

2. 性の発達の程度が高いものほど、愛情の対象を依存の焦点とする有意な傾向があった。

3. 性の発達の程度が低いものほど、家族を依存の焦点とする有意な傾向はみられなかった。しかし、女性ではそれを示唆する傾向があった。

4. 性の発達の程度が低いものほど、親友を依存の焦点とする有意な傾向はみられなかった。しかし、男性・女性ともそれを示唆する傾向があった。

引 用 文 献

- 土居健郎 1970 精神分析と精神病理 第2版 医学書院
- Eysenck, H. J. 1970 Personality and attitudes to sex: A factorial study. *Personality*, 1, 355-376.
- Eysenck, H. J. 1976 *Sex and personality*. London: Open Books.
- フロイト, A. 外林大作(訳) 1958 自我と防衛 誠信書房 (Freud, A. 1936 *Das Ich und Abwehrmechanismen*. Internationaler Psychoanalytischer Verlag.)
- フロイト, S. 懸田克躬・吉村博次(訳) 1969 性欲論三篇 フロイト著作集 第5巻 人文書院 (Freud, S. 1905 *Drei abhandlungen zur Sexualtheories*.)
- Harlow, H. F., & Harlow, M. K. 1962 Social deprivation in monkeys. *Scientific American*, 207, 136-146.
- Kinsey, A. C., Pomeroy, W. B., & Martin, C. E. 1948 *Sexual behavior in the human male*. Philadelphia: Saunders.
- 間宮 武 1976 わが国青年(学生・生徒)における性行動の性差に関する調査研究 横浜国立大学教育紀要, 16, 14-48.
- Schofield, M. 1968 *The sexual behaviour of young people*. London: Penguin Books.
- 総理府青少年対策本部 1971 青少年の性意識 大蔵省印刷局
- 総理府青少年対策本部 1975 青少年の性行動 日本性教育協会(編) 小学館
- サリヴァン, H. S. 中井久夫・山口 隆(訳) 1976 現代精神医学の概念 (Sullivan, H. S. 1953 *Conceptions of modern psychiatry*. New York: Norton)
- 高橋恵子 1968 女子青年における依存性の発達 依田新(編) 現代青年の人格形成 金子書房 Pp. 21-44.
- 高橋恵子 1973 女子青年における依存の発達 児童心理学の進歩, 12, 金子書房, 256-280.
- 高橋恵子 1976 親子関係と発達 岡本夏木・三宅和夫(編) 心理学5 発達 有斐閣 Pp. 85-102.
- 田中靖政 1973 日本の若者たちの性的後進性と今後の課題 現代性教育研究, 5, 小学館, 32-39.

SUMMARY

The purpose of the present study was to examine the correspondence between sexual development and targets of dependence in college students.

In Study I, the association between sexual consciousness (S-C) and sexual behaviour (S-B) was examined. A questionnaire was used to investigate their sexual attitudes and to evaluate their S-C and S-B in terms of six progressive stages ranging from socializing in mixed-sex groups to sexual intercourse.

The main results were as follows :

(1) Subjects higher in S-C, as defined by the permissible limit in relationship with the opposite sex, were more open to such sexual matters as virginity and sex-related talks. They, however, tended to be sensitive to and troubled by their own sexual desires and concerns (see Table 2).

(2) Subjects higher in S-B, as defined by actual sexual experiences, were more open to sexual matters and also enjoyed their relationship with the opposite sex (see Table 3).

(3) The comparison between S-C and S-B showed that S-C on average tended to be higher than S-B in both males and females. Correspondingly, a great number of subjects showed discrepancies between S-C and S-B (see

Table 4).

In Study II, the correspondence between sexual development (S-D) and targets of dependence was examined. The subjects were divided into low-, middle-, and high-S-D groups by combining their S-C and S-B scores. The central target (focus) was determined by three factors : Object, mode, strength.

The main results were as follows :

(1) About 45% of both males and females selected their lovers as a focus of their dependence. This ratio was much higher than any other targets (see Table 5).

(2) The higher subjects were in S-D, the more likely they were to select their lovers as a focus. This tendency was statistically significant (see Fig.1).

(3) In females, there was a tendency, although not statistically significant, suggesting that the lower subjects were in S-D, the more likely they were to select their family members as a focus (see Fig.2).

(4) Both males and females showed a tendency, while not statistically significant, suggesting that the lower subjects were in S-D, the more likely they were to select their best friends as a focus (see Fig.3).